

アグニの神（芥川龍之介）

—

支那^{シナ}の上海^{シャンハイ}の或町^{ある}です。昼でも薄暗い或家の二階に、人相の悪い印度^{インド}人の婆さんが一人、商人らしい一人の亜米利加人^{アメリカ人}と何か頻^{しきり}に話し合っていました。

「実は今度もお婆さんに、占いを頼みに来たのだがね、——」
亜米利加人はそう言いながら、新しい巻煙草^{まきたばこ}へ火をつけました。

「占いですか？ 占いは当分見ないことにしましたよ」

婆さんは嘲^{あざけ}るように、じろりと相手の顔を見ました。

「この頃は折角見て上げても、御礼さえ碌^{ろく}にしない人が、多くなって来ましたからね」

「そりや勿論^{もちろん}御礼をするよ」

亜米利加人は惜しげもなく、三百弗^{ドル}の小切手を一枚、婆さんの前へ投げてやりました。

「差当りこれだけ取って置くさ。もしお婆さんの占いが当れば、その時は別に御礼をするから、——」

婆さんは三百弗の小切手を見ると、急に愛想^{あいそ}がよくなりませんでした。

「こんなに沢山頂いては、反^{かえ}って御気の毒ですな。——そうして一体又あなたは、何を占ってくれろとおっしゃるんです？」

「私^{わたし}が見て貰^{もら}いたいののは、——」

亜米利加人は煙草を啣^{くわ}えたなり、狡猾^{こうかつ}そうな微笑を浮べました。

「一体日米戦争はいつあるかということなんだ。それさえちやんとわかっていれば、我々商人は忽ち^{たちまち}の内に、大金儲け^{おおかねもち}が出来るからね」

「じゃ明日^{あした}いらっしゃい。それまでに占って置いて上げますから」

「そうか。じゃ間違いのないように、——」

印度人の婆さんは、得意そうに胸を反^そらせました。

「私の占いは五十年来、一度も外^{はず}れたことはないのですよ。何しろ私のはアグニの神が、御自身御告げをなさるのですからね」

亜米利加人が帰ってしまうと、婆さんは次の間の戸口へ行って、

「恵蓮^{えれん}。恵蓮」と呼び立てました。

その声に応じて出て来たのは、美しい支那人の女の子です。が、何か苦勞でもあるのか、この女の子の下^{しも}ぶくれの頬^ほは、まるで蠟^{ろう}のような色をしていました。

「何を愚^ぐ図^ず々々^{ずず}しているんだえ？ ほんとうにお前位、ずうずうしい女はありやしないよ。きつと又台所で居睡^{いねむ}りか何かしていたんだろう？」

恵蓮はいくら叱^{しか}られても、じっと俯向^{うつむ}いたまま黙っていました。

「よくお聞きよ。今夜は久しぶりにアグニの神へ、御伺いを立てるんだからね、そのつもりでいるんだよ」

女の子はまっ黒な婆さんの顔へ、悲しそうな眼を挙げました。

「今夜ですか？」

「今夜の十二時。好いかえ？ 忘れちゃいけないよ」

印度人の婆さんは、脅すように指を挙げました。

「又お前がこの間の間に、私に世話ばかり焼かせる、今度こそお前の命はないよ。お前なんぞは殺そうと思えば、雛仔の頸を絞めるより——」

こう言いかけた婆さんは、急に顔をしかめました。ふと相手に気がついて見ると、惠蓮はいつか窓際に行つて、丁度明いていた硝子窓から、寂しい往来を眺めているのです。

「何を見ているんだえ？」

惠蓮は愈色を失つて、もう一度婆さんの顔を見上げました。

「よし、よし、そう私を莫迦にするんなら、まだお前は痛い目に会い足りないんだろう」

婆さんは眼を怒らせながら、そこにあつた箒をふり上げました。

丁度その途端です。誰か外へ来たと見えて、戸を叩く音が、突然荒々しく聞え始めました。

二

その日のかれこれ同じ時刻に、この家の外を通りかかった、年の若い一人の日本人があります。それがどう思ったのか、二階の窓から顔を出した支那人の女の子を一目見ると、しば

らくは呆氣にとられたように、ぼんやり立ちすくんでしまいました。

そこへ又通りかかったのは、年をとった支那人の人力車夫です。

「おい。おい。あの二階に誰が住んでいるか、お前は知っていないかね？」

日本人はその人力車夫へ、いきなりこう問いかけた。支那人は楯棒を握つたまま、高い二階を見上げましたが、「あすこですか？ あすこには、何とかいう印度人の婆さんが住んでいます」と、気味悪そうに返事をする、匆々行きそうにするのです。

「まあ、待ってくれ。そうしてその婆さんは、何を商売にしているんだ？」

「占い者です。が、この近所の噂じゃ、何でも魔法さえ使うそうです。まあ、命が大事だったら、あの婆さんの所なぞへは行かない方が好いようですよ」

支那人の車夫が行つてしまつてから、日本人は腕を組んで、何か考えているようでしたが、やがて決心でもつたのか、さつさとその家の中へはいって行きました。すると突然聞えて来たのは、婆さんの罵る声に交つた、支那人の女の子の泣き声です。日本人はその声を聞くが早いか、一股に二三段ずつ、薄暗い梯子を駆け上りました。そうして婆さんの部屋の戸を力一ぱい叩き出しました。

戸は直ぐに開きました。が、日本人が中へはいって見ると、そこには印度人の婆さんがたつた一人立っているばかり、もう支那人の女の子は、次の間へでも隠れたのか、影も形も見

当りません。

「何か御用ですか？」

婆さんはさも疑わしそうに、じろじろ相手の顔を見ました。

「お前さんは占い者だろう？」

日本人は腕を組んだまま、婆さんの顔を睨み返しました。

「そうです」

「じゃ私の用なぞは、聞かなくてもわかってるじゃないか？」

私も一つお前さんの占いを見て貰いにやって来たんだ」

「何を見て上げるんですえ？」

婆さんは益々疑わしそうに、日本人の容子を窺っていました。

「私の主人の御嬢さんが、去年の春行方知れずになった。それを一つ見て貰いたいんだが、——」

日本人は一句一句、力を入れて言うのです。

「私の主人は香港の日本領事だ。御嬢さんの名は妙子さんとおっしゃる。私は遠藤という書生だが——どうだね？ その御嬢さんはどこにいらつしやる」

遠藤はこう言いながら、上衣の隠しに手を入ると、一挺のピストルを引き出しました。

「この近所にいらつしやりはしないか？ 香港の警察署の調べた所じゃ、御嬢さんを攫ったのは、印度人らしいということだったが、——隠し立てをすると為にならんぞ」

しかし印度人の婆さんは、少しも怖がる気色が見えませんが、見えないどころか唇には、反って人を莫迦にしたような微笑さえ浮べているのです。

「お前さんは何を言うんだえ？ 私はそんな御嬢さんなんぞ

は、顔を見たこともありやしないよ」

「嘘をつけ。今その窓から外を見ていたのは、確かに御嬢さんの妙子さんだ」

遠藤は片手にピストルを握ったまま、片手に次の間の戸口を指さしました。

「それでもまだ剛情を張るんなら、あすここに居る支那人をつれて来い」

「あれは私の貰い子だよ」

婆さんはやはり嘲るように、にやにや独り笑っているのです。

「貰い子が貰い子でないか、一目見りゃわかることだ。貴様がつれて来なければ、おれがあすこへ行つて見る」

遠藤が次の間へ踏みこもうとすると、咄嗟に印度人の婆さんは、その戸口に立ち塞がりました。

「ここは私の家だよ。見ず知らずのお前さんなんぞに、奥へはいられてたまるものか」

「退け。退かないと射殺すぞ」

遠藤はピストルを挙げました。いや、挙げようとしたのです。が、その拍子に婆さんが、鴉の啼くような声を立てたかと思うと、まるで電気に打たれたように、ピストルは手から落ちてしまいました。これには勇み立った遠藤も、さすがに胆をひしがれたのでしよう、ちよいとの間は不思議そうに、あたりを見廻していましたが、忽ち又勇気をとり直すと、「魔法使め」と罵りながら、虎のように婆さんへ飛びかかりました。

が、婆さんもさるものです。ひらりと身を躲すが早いか、

そこにあつた箒をとって、又掴みかかろうとする遠藤の顔へ、床の上の五味を掃きかけました。すると、その五味が皆火花になって、眼といわず、口といわず、ばらばらと遠藤の顔へ焼きつくのです。

遠藤はとうとうたまり兼ねて、火花の旋風に追われながら、転げるように外へ逃げ出しました。

三

その夜の十二時に近い時分、遠藤は独り婆さんの家の前にたたずみながら、二階の硝子窓に映る火影を口惜しそうに見つめていました。

「折角御嬢さんの在りかをつきとめながら、とり戻すことが出来ないのは残念だな。一そ警察へ訴えようか？ いや、いや、支那の警察が手ぬるいことは、香港でもう懲り懲りしている。万一今度も逃げられたら、又探るのが一苦労だ。いつてあの魔法使には、ピストルさえ役に立たないし、——」

遠藤がそんなことを考えていると、突然高い二階の窓から、ひらひら落ちて来た紙切れがあります。

「おや、紙切れが落ちて来たが、——もしや御嬢さんの手紙じゃないか？」

こう呟いた遠藤は、その紙切れを、拾い上げながらそっと隠した懐中電燈を出して、まん円な光に照らして見ました。すると果して紙切れの上には、妙子を書いたのに違いな、消えそうな鉛筆の跡があります。

「遠藤サン。コノ家ノ才婆サンハ、恐シイ魔法使デス。時々真夜中ニ私ノ体へ、『アグニ』トイウ印度ノ神ヲ乗リ移ラセマス。私ハソノ神ガ乗リ移ッテイル間中、死ンダヨウニナッテイルノデス。デスカラドンナ事ガ起ルカ知リマセンガ、何デモ才婆サンノ話デハ、『アグニ』ノ神ガ私ノ口ヲ借りテ、イロイロ予言ヲスルノダソウデス。今夜モ十二時ニハ才婆サンガ又『アグニ』ノ神ヲ乗リ移ラセマス。イツモダト私ハ知ラズ知ラズ、気が遠クナッテシマウノデスガ、今夜ハソウナラナイ内ニ、ワザト魔法ニカカッタ真似ヲシマス。ソウシテ私ヲ才父様ノ所ヘ返サナイト『アグニ』ノ神ガ才婆サンノ命ヲトルト言ッテヤリマス。才婆サンハ何ヨリモ『アグニ』ノ神ガ怖イノデスカラ、ソレヲ聞ケバキツト私ヲ返スダロウト思イマス。ドウカ明日ノ朝モウ一度、才婆サンノ所ヘ来テ下サイ。コノ計略ノ外ニハ才婆サンノ手カラ、逃ゲ出スミチハアリマセン。サヨウナラ」

遠藤は手紙を読み終ると、懐中時計を出して見ました。時計は十二時五分前です。

「もうそろそろ時刻になるな、相手はあんな魔法使だし、御嬢さんはまだ子供だから、余程運が好くないと、——」

遠藤の言葉が終らない内に、もう魔法が始まるのでしよう。今まで明るかった二階の窓は、急にまっ暗になってしまいました。と同時に不思議な香の匂が、町の敷石にも滲みる程、どこからか静に漂って来ました。

四

その時あの印度人の婆さんは、ランプを消した二階の部屋の机に、魔法の書物を拵ひろうげながら、頻しきりに呪文じゅもんを唱えていました。書物は香炉の火の光に、暗い中でも文字だけは、ぼんやり浮き上がっているのです。

婆さんの前には心配そうな惠蓮が、——いや、支那服を着せられた妙子が、じっと椅子に坐っていました。さつき窓から落した手紙は、無事に遠藤さんの手へはいったであろうか？ あの時往來にいた人影は、確に遠藤さんだと思ったが、もしや人違いではなかったであろうか？——そう思うと妙子は、いても立ってもいられないような気がして来ます。しかし今うっかりそんな氣けぶりが、婆さんの眼にでも止まったが最後、この恐しい魔法使いの家から、逃げ出そうという計略は、すぐに見破られてしまうでしょう。ですから妙子は一生懸命に、震える両手を組み合せながら、かねてたくんで置いた通り、アグニの神が乗り移ったように、見せかける時の近づくのを今か今かと待っていました。

婆さんは呪文を唱えてしまうと、今度は妙子をめぐりながら、いろいろな手ぶりをし始めました。或時は前へ立ったまま、両手を左右に挙げて見せたり、又或時は後へ来て、まるで眼かくしでもするように、そっと妙子の額の上へ手をかざしたりするのです。もしこの時部屋の外から、誰か婆さんの容子あおこを見ていたとすれば、それはきっと大きな蝙蝠こうもりか何かが、蒼白い香炉の火の光の中に、飛びまわってでもいるように見

えたでしょう。

その内に妙子はいつものように、だんだん睡氣ねむけがきざして来ました。が、ここで睡ねってしまつては、折角の計略にけることも、出来なくなつてしまふ道理です。そうしてこれが出来なければ、勿論二度とお父さんの所へも、帰れなくなるのに違いありません。

「日本の神々様、どうか私わたしが睡らないように、御守りなすつて下さいまし。その代り私はもう一度、たとい一目でもお父さんの御顔を見ることが出来たなら、すぐに死んでもよろしゅうございます。日本の神々様、どうかお婆さんを欺だませるように、御力を御貸し下さいまし」

妙子は何度も心の中に、熱心に祈りを続けました。しかし睡氣はおいおいと、強くなつて来るばかりです。と同時に妙子の耳には、丁度銅鑼どらでも鳴らすような、得体の知れない音楽の声が、かすかに伝わり始めました。これはいつでもアグニの神が、空から降りて来る時に、きつと聞える声なのです。もうこうなつてはいくら我慢しても、睡らずにいることは出来ません。現に目の前の香炉の火や、印度人の婆さんの姿でさえ、氣味の悪い夢が薄れるように、見る見る消え失うせてしまふのです。

「アグニの神、アグニの神、どうか私わたしの申すことを御聞き入れ下さいまし」

やがてあの魔法使いが、床の上にひれ伏したまま、嚔しわがれた声を挙げた時には、妙子は椅子に坐りながら、殆ど生死も知らないように、いつかもうぐっすり寝入っていました。

妙子は勿論婆さんも、この魔法を使う所は、誰の眼にも触れないと、思っていたのに違いありません。しかし実際は部屋の外に、もう一人戸の鍵穴から、覗いている男があったのです。それは一体誰でしょうか？——言うまでもなく、書生の遠藤です。

遠藤は妙子の手紙を見てから、一時は往来に立ったなり、夜明けを待とうかとも思いました。が、お嬢さんの身の上を思うと、どうしてもじっとしてはいられません。そこでとうとう盗人のように、そつと家の中へ忍びこむと、早速この二階の戸口へ来て、さつきから透き見をしていたのです。

しかし透き見をしてみると、何しろ鍵穴を覗くのですから、蒼白い香炉の火の光を浴びた、死人のような妙子の顔が、やっと正面に見えるだけです。その外は机も、魔法の書物も、床にひれ伏した婆さんの姿も、まるで遠藤の眼にははいりません。しかし覗いた婆さんの声は、手にとるようにはつきり聞えました。

「アグニの神、アグニの神、どうか私の申すことを御聞き入れ下さいまし」

婆さんがこう言ったと思うと、息もしないように坐っていた妙子は、やはり眼をつぶったまま、突然口を利き始めました。しかもその声がどうしても、妙子のような少女とは思われない、荒々しい男の声なのです。

「いや、おれはお前の願いなぞは聞かない。お前はおれの言

いつけに背いて、いつも悪事ばかり働いて来た。おれはもう今夜限り、お前を見捨てようと思っている。いや、その上に悪事の罰を下してやろうと思っている」

婆さんは呆気にとられたのでしよう。暫くは何とも答えずに、喘ぐような声ばかり立てていました。が、妙子は婆さんに頓着せず、おごそかに話し続けるのです。

「お前は憐れな父親の手から、この女の子を盗んで来た。もし命が惜しかったら、明日とも言わず今夜の内に、早速この女の子を返すが好い」

遠藤は鍵穴に眼を当てたまま、婆さんの答を待っていました。すると婆さんは驚きでもするかと思いの外、憎々しい笑い声を洩らしながら、急に妙子の前へ突つ立ちました。

「人を莫迦にするのも、好い加減におし。お前は私を何だと思っているのだえ。私はまだお前に欺される程、毫碌はしていない心算だよ。早速お前を父親へ返せ——警察の御役人じやあるまいし、アグニの神がそんなことを御言いつけになつてたまるものか」

婆さんはどこからとり出したか、眼をつぶった妙子の顔の先へ、一挺のナイフを突きつけました。

「さあ、正直に白状おし。お前は勿体なくもアグニの神の、声色を使っているのだらう」

さつきから容子を窺っていても、妙子が実際睡っていることは、勿論遠藤にはわかりません。ですから遠藤はこれを見ると、さては計略が露顕したかと思わず胸を躍らせました。が、妙子は相変らず目蓋一つ動かさず、嘲笑うように答えるのです。

「お前も死に時が近づいたな。おれの声がお前には人間の声に聞えるのか。おれの声は低くとも、天上に燃える炎の声だ。それがお前にはわからないのか。わからなければ、勝手にするが好い。おれは唯お前に尋ねるのだ。すぐにこの女の子を送り返すか、それともおれの言いつけに背くか——」

婆さんはちよいとためらったようです。が、忽ち勇氣をとり直すと、片手にナイフを握りながら、片手に妙子の襟髪を掴んで、ずるずる手もとへ引き寄せました。

「この阿魔め。まだ剛情を張る気だな。よし、よし、それなら約束通り、一思いに命をとってやるぞ」

婆さんはナイフを振り上げました。もう一分間遅れても、妙子の命はなくなります。遠藤は咄嗟に身を起すと、錠のかった入口の戸を無理無体に分けようとしてしました。が、戸は容易に破れません。いくら押しても、叩いても、手の皮が摺り剥けるばかりです。

六

その内に部屋の中からは、誰かのわつと叫ぶ声が、突然暗やみに響きました。それから人が床の上へ、倒れる音も聞えたようです。遠藤は殆ど気違いのように、妙子の名前を呼びかけながら、全身の力を肩に集めて、何度も入口の戸へぶつかりました。

板の裂ける音、錠のはね飛ぶ音、——戸はとうとう破れました。しかし肝腎の部屋の中は、まだ香炉に蒼白い火がめらめら燃えているばかり、人気のないようになっています。

遠藤はその光を便りに、怯ず怯ずあたりを見廻しました。するとすぐに眼にはいったのは、やはりじつと椅子にかけた、死人のような妙子です。それが何故か遠藤には、頭に毫光でもかかっているように、厳かな感じを起させました。

「御嬢さん、御嬢さん」

遠藤は椅子へ行くと、妙子の耳もとへ口をつけて、一生懸命に叫び立てました。が、妙子は眼をつぶったなり、何とも口を開きません。

「御嬢さん。しっかりおしなさい。遠藤です」

妙子はやっと夢がさめたように、かすかな眼を開きました。

「遠藤さん？」

「そうです。遠藤です。もう大丈夫ですから、御安心なさい。

さあ、早く逃げましょう」

妙子はまだ夢現のように、弱々しい声を出しました。

「計略は駄目だったわ。つい私が眠ってしまったものだから、

——堪忍して頂戴よ」

「計略が露顕したのは、あなたのせいじゃありませんよ。あなたは私と約束した通り、アグニの神の憑った真似をやり了せたじゃありませんか？——そんなことはどうでも好いことです。さあ、早く御逃げなさい」

遠藤はもどかしそうに、椅子から妙子を抱き起しました。

「あら、嘘。私は眠ってしまったのですもの。どんなことを言ったか、知りはいないわ」

妙子は遠藤の胸に凭れながら、呟くようにこう言いました。

「計略は駄目だったわ。とても私は逃げられなくてよ」

「そんなことがあるのですか。私と——しよにいらつしやい。」

今度しくじったら大変です」

「だってお婆さんがいるでしょう？」

「お婆さん？」

遠藤はもう一度、部屋の中を見廻しました。机の上にはさっきの通り、魔法の書物が開いてある、——その下へ仰向あおむきに倒れているのは、あの印度人の婆さんです。婆さんは意外にも自分の胸へ、自分のナイフを突き立てたまま、血だまりの中に死んでいました。

「お婆さんはどうして？」

「死んでいます」

妙子は遠藤を見上げながら、美しい眉をひそめました。

「私、ちっとも知らなかったわ。お婆さんは遠藤さんが——あなたが殺してしまったの？」

遠藤は婆さんの屍骸しかいから、妙子の顔へ眼をやりました。今夜の計略が失敗したことが、——しかしその為に婆さんも死ねば、妙子も無事に取り返せたことが、——運命の力の不思議なことが、やっと遠藤にもわかったのは、この瞬間だったのです。

「私が殺したのじゃありません。あの婆さんを殺したのは今夜ここへ来たアグニの神です」

遠藤は妙子を抱かかえたまま、おごそかにこう囁ささやきました。